

月報 N073

神戸山岳会

発行日 48,12,12

発行所

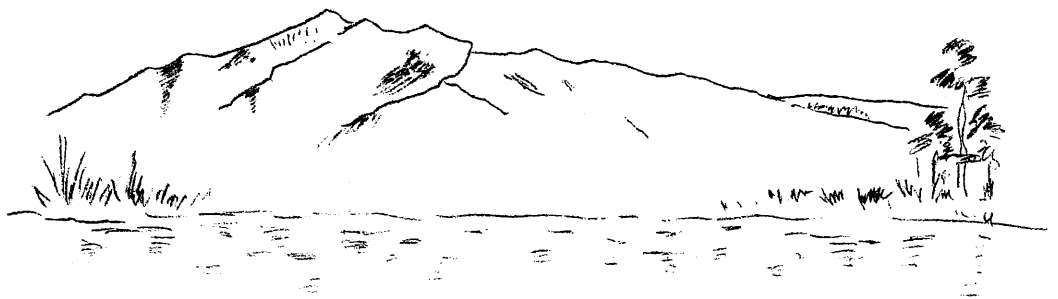
神戸市生田区中山手通1丁目

105の9 前田方

発行者 乾 昌弘

例・集会スケジュール・1月・2月

1/13	反省会	前田宅	9:00	
	新年会	場所未定	14:00	
1/20	堡壘岩R・C・T	阪急六甲前夜	20:00	三浦
1/27	氷ノ山スキーツアー (コース未定)	国鉄宝塚前夜	21:00	釜本
2/3	アイゼンテクニック 白石谷一軒滝	阪急六甲前夜	20:00	内藤②
2/10~11	扇ノ山スキーツアー (コース未定)	国鉄宝塚前夜	21:00	岸本
2/17	妙号岩R・C・T	平野	当日 8:30	立岡
2/24	ポッカ 黒岩尾根一長峰尾根	布引	当日 8:30	宮本
1/16 2/13	集会 於 研修所		(18:30)	
1/9 2/6	委員会 於 前田宅		(19:00)	



目 次

7.4, 冬山合宿計画概要	3
---------------	---

個人山行

明神山 (667, 8米)	4
---------------	---

東多紀アルプス山行記	6
------------	---

南紀・黒蔵谷遊行	8
----------	---

錫杖岳・鳥帽子岩	11
----------	----

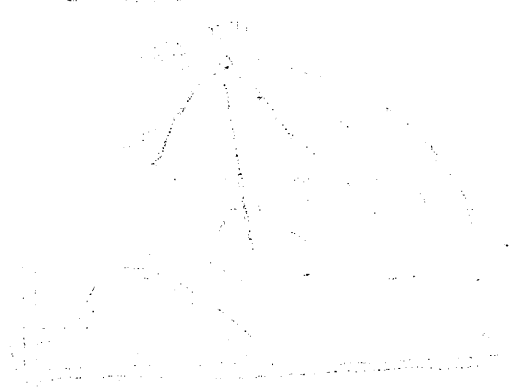
"海 の 歌"	13
---------	----

会員動静	14
------	----

7 4 , 冬山合宿計画概要

- 登山地 蝶岳、常念岳、大天井岳
- 目的 常念岳周辺の概念把握及び冬山生活技術習得
- 期間 昭和48年12月30～昭和49年1月6日
- 参加者 大塚、野上①、教野(C.L.)、釜本、西原、立岡、植原、三浦、萩本、武田
(計10名)
- 計画

12/29	神戸発
12/30	中の湯-上高地-徳沢出合-長堀尾根-2000m峰
12/31	2000m峰-蝶岳
1/1	蝶岳-常念岳
1/2	常念岳-大天井岳往復
1/3	常念岳-横尾
1/4	帰神
1/5	予備日
1/6	



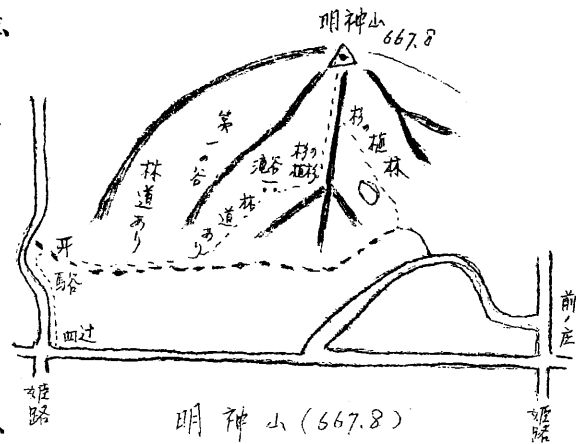
明神山(667,8米)

三宅 信道

雪彦山から、南を望んだとき、はるか彼方に、槍の穂先を思わせるピークが望見される。これが明神山で高度はせいぜい667米と、六甲・雪彦その他の兵庫県下の山々に比べて、いささかおとる。しかし、この山、なかなか容姿端麗とばかりに登頂を思っていた二人、明神山目指して出発となった。

11:00、四辻でバスを降り、工事中の中国縦貫道路の高架下を潜り馬谷部港で右折して谷あいの道をゆく。間もなく、第一の谷の出口を過ぎて、第二の谷の出合に着く。ここで、働いていた農夫に明神山の登路について尋ねると、谷筋を行った方が楽だと、大して驚いていない様子。この調子では、若干の登山者もいるものと思われた。この谷は林道が奥まで伸びているが、5~600米入ったところで、小径となり、小さな滝の左岸をまくようになる。ここに堰堤があり、この上で食事をする。ここから見る明神山は望見した槍状ではなく、頂上は、ややドーム状で、いわば、おむすび型の山だ。しかし、その山腹は樹木がしげり、急傾斜で登路らしきものは見当らない。食後、谷に下り、少し行くと、若干の小さな枯れた谷筋に小径がある。本流は更に奥に伸びているが、水量も少なく、且つ踏跡もさだかでない。しばらく地図と相談の後右に入る小径を辿る。この径は、明神山から南へ伸びる尾根へ突き上げていると判断して、植林の中のかすかな踏跡を辿る。約30分位で尾根に飛び出た。予想通り、かすかではあるが、尾根には踏跡があり北へブッシュを分けながら辿っていく。この径は時として、僅かながらの岩尾根が出て来たりして楽しい。行く程に、一寸したコルに出て小憩する。右の谷へ降りる踏跡があり、帰りはこれを降ろうと決める。

間もなく、急な登りになるが、径はかえってはっきりとして来た。小径を埋める枯葉をふみしめ急登は続く。登ほどに径はけわしく、木の枝、岩角など頼りに登る。頂上間近と思われる頃、径はゆるくなって来たが、踏跡は乱れて少し分かり難い。やっと頂上に着き、林を抜けたところにある三角点横の大岩の上に憩う。北面は雪彦・峰山・黒尾などが望まれ、東に七種山魂が連なる。西面は樹木にさえぎられ、やや眺望が悪い。小憩後、頂上を後にしたが、間もなく、径を失ないヤブの中をしばらく右往左往したが、



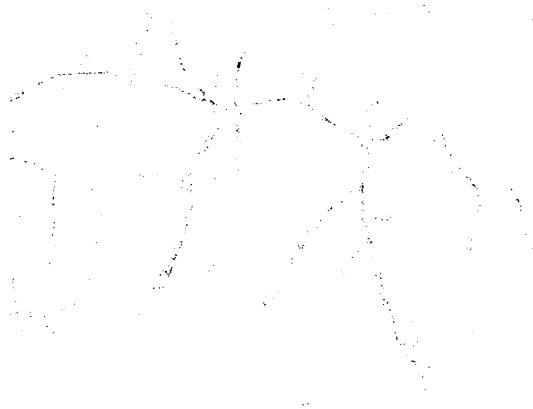
磁石と相談の結果、急斜面をトラバースして、元の径に戻り、後は今来た径を一気加勢にコルま
 走るように降りた。コルで休んでいると、我々の辿った径を一人の登山者が来た。彼の言による
 と、前に一度登ったが、降りるとき径を失ないヤブの中を西に降りてしまい困ったとのこと。
 コルから星なお暗いような杉の植林の谷へ降り、水の枯れた谷沿いの径を辿る。中途、水が流れ
 ていたらきれいだろうと思われる大きな滑の傍を通り、やがて、登る途中に見た大きな池の土手
 に出て小憩。この池は湧水のためか、殆んど干上ってしまっている。しかし、満水のときなど、
 背面の明神山がその姿を水面に浮べて見せるであろうと想像される。池からは田んぼの中の道を
 とおり、神種、菰生、を径て前之庄 前バス停着、後はバスで姫路に向った。

(月 日) 10月10日(水)

(天 候) 晴

(パーティ) 新川 利夫 三宅 信道

(タイム) 姫路10:15(バス) 四辻11:00馬谷11:20滝谷
 堤11:50(食事) 12:10分岐12:20尾根12:50
 コル13:20頂上13:50~14:40コル 14:40池
 15:10前之庄バス停16:10~16:31姫路17:15。



東多紀アルプス山行記

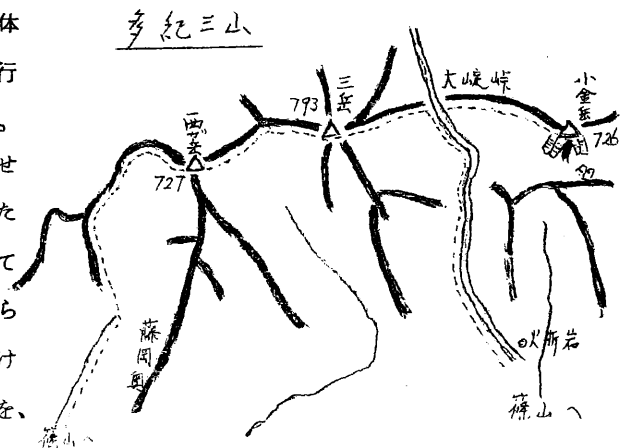
どこにでもあるような小さな山路に、野路菊が、朝露に光っている。白髪を風になびかせて声をかけていくスキに、紅葉は舞い舞い散ってゆく。全ての生物にキッセンしながら陽は昇る。生命の賛歌が縦横に満ちて、ひそやかなる喜びをあふれさせ、今、山は夜明けを迎えた。いつしか知らず融け込んでゆく我身は、何年も何年もそこに在ったかの如く何のためらいもなしにひたってしまう。

まるで初めての山だという感じをみじんも感じさせないで、登りつめた峠の向こうに、雲海が敷きつめ、その向こうに北の山々が、眠りから目覚めかけている。そう、こんな風景にどこかで幾度か巡りあったけれど、それはどこだかはっきりとはしない。自分が、かつて求めた一つの幻想が長い眠りから目覚めたあのちっぽけな数秒間の一コマであるにすぎないのだ。しかし、今、この移りゆく自然のその中に何のためらいもなしに、何の拒絶や障害もなく今、この生命感あふれるその中に、ためらいもなく身をさらすことのできた喜びは、柔らかな秋の陽射した相混り、無限の空間へと四散してゆく。頬に触れなかったかわからない微やかな風が、心地良く、辿り着いた頃には、主を失したベンチがライトブルーの空の下、かすかに色づいた木々に囲まれて、ひっそり閑として横たわっている。

ちょっとばかり汗ばんだ肌の汗をぬぐい四方の景色をゆくりなく眺め、そしてベンチに身を横たえて、急ぐともなく流れていく雲を見つめていると、いつしか知らず夢幻の世界に落ちこんでゆく。ひそとして音は立たず、時折きこえてくるのは、雲海の中で、いや朝霧の中からか、それはどこからかも分らぬ所からきこえてくる小鳥の声に混って誰かが、ささやいている。呼んでいる。……………

ハッとして目覚めれば、陽光は汗に濡れた身体に惜しみなくふりそそいでいる。そして友が、「行きましょうか」と、にこやかに声をかけてきた。

こんなに心がユッタリとくつろいだ気持ちにさせられたのは何時以来だろうか。激しく揺れ動いたこの一年余り。それは、自分として変革を求めて止まらない心の変遷で低迷し、そしてその中から見つけだした。かそけきレールの軌道に乗りかけた現在にあって、どこかに置き忘れていたものを、



探しあてたような気がしてうれしくなる。

「さあ、いこうか」と合槌をうち、ベンチに別れを告げる。今度は、何処の誰が腰かけて、心を交わしてゆくのだろうか。そしてどんな夢を持たらすのだろうか。来た道をとってかえし時に戻れば野路菊は杉の木陰から微笑みかけてくる。薄紫色の花びらをみつめれば、何故か心ひかれスケッチブックを、今日のルールにとどめようと、筆を走らせる。友は友で水彩のペイントを白いノートに飾っている。

それをチョット拝借して、僕のノートにも飾りつけをしてやれば、何者にもかえがたい今日の記念だ。

そして、二つ三つと小さな頂きで一服しつつ、落葉を踏みしめる足どりも充たされない思いにまつわりつくイノソコ等を一つ一つ取り去る手も、喜びとなって友とふざけ合って気も軽やかとなり、日の傾きかけた丹波の山里を充たされてずっしりと重くなった心をひきつけて、快い気だるさを、学友Yと共に一杯のビアに分けあって、篠山の町を去った。

10月10日(晴)

火打岩-小金岳-三岳-西岳-篠山

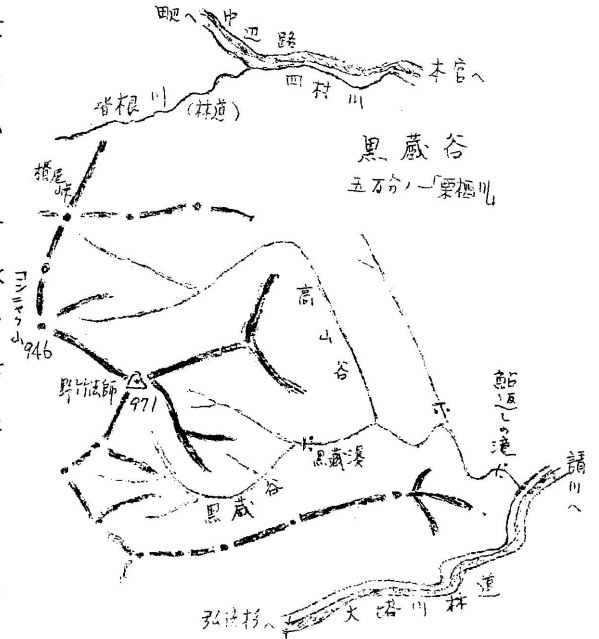
(記・岡)

南紀・黒蔵谷廻行

連休と言うとアルプスへ赴く昨今、地味な登山、沢登りを行なおうと計画を立て、和歌山県下で最悪の谷と言われる、大塔川の支流、黒蔵谷に足を向けることになった。しかし、この沢の源である野竹法師山からの登山道が地図に記してないのと、記録によると沢心を泳いで行く箇所があるので、時期的に迷いもあったが、こういう機会はなかなかないので決行することになった。

11月2日 最終の急行で新宮へ向かうが、連休のためか列車は満員、我々も窓から入り新宮まで立ちんぼりで、あすからの行動に影響はないかと少なからず心配であった。

11月3日 (晴) 新宮からバスに乗り変え請川で降りる。(この間、登山者は我々ともう一パーティーだけである。) ここから先はバスがないのでタクシーを頼み、川の中にある温泉を横目に見ながら、大塔川林道を30分ぐらい進み黒蔵谷出合で降りる。天気は申し分ない。身仕度を整えてから出発。黒蔵谷に入るため、大塔川を膝までの徒渉で右に渡り、最初の滝、鮎返し（あはせがし）の滝に出合う。左を巻いて沢に降りて進む。長い淵が表われ出し、左を巻いて降りようとするがゴルジュのため下降することができない。そのまま100mぐらい進み、きりがないので滑り台のようなスラブを降りる、水深は3m以上もあるうか、うまい具合に流木が橋の代わりにしてくれ対岸に渡ることができた。廊下がえんえんと続き、そこにかかる滝はスケールは小さいが底が望めない釜と淵がつきつぎに表われる。地下足袋にワラジで軽快に進む。三連の釜を通過、この釜は下の部分にあながあきそこからも流れが連なっている。出合から三時間も進んだところで我々は行きづまってしまった。高巻きもすればできるが先をいそぎたいのでやむなく腰までつかって淵をぬける。するとつぎの淵は深さ3~4mもあるうか、どうすることもできないのでさっそく泳ぐことにする。水はつめたく、空気もつめたい。二人とも海水パンツ一つで進む。つぎの釜も泳ぐ。三回ぐらい泳いで下の廊下をぬけ、第一支流につき、河原状の日のあたるところで体を暖めながら昼食をとる。ここでもうザックの中まで水は入りこんで、シュラフをも濡ら



してしまう。小憩の後、150mほどの側壁を横に、中の廊下に入る。そしてつぎつぎに現われる釜や淵を腰から胸までつかりながらF4に着く。この滝は、どうしようもないので高巻きをしてアブザイレンで沢に降り立つ。なおも進むと高山谷の出合に着く。ここまでで中の廊下が終り河原状になる。左に進みF5を過ぎ、巨岩の重なる場所を通り河原を進む、日はもうこの深い谷の中までは届かず、薄暗い中を進む。記録によるともうすぐ黒蔵瀑が現われるはずと胸をおどらせながら進む。深く黒い釜の手前でF6を左に巻くと、目の前に堂々たる白い瀑を見せる滝が目に入る、地元で幻の滝と云われている黒蔵瀑である。記録では25mとあるが、なかなか、40mはあろうか、みごとな滝である。廻行の疲れを癒してくれるに値する滝。しばし二人は滝に見とれる。予定ではこの滝をこえて第三支流の上流でビパークの予定、時間も遅く、滝を右に巻いてアブザイレンで沢に降り第三支流を通過し、続くF8、F9と巻いて河原に出る。沢筋全体が核心部で、最大の黒蔵瀑を征服した途端に安堵感と共に今までの緊張が一度にほぐれ、急に疲れが出てなぜか心の中がむなしくなり虚無感にかられ、もう前へ進むのがいやになる。そんな気持でビパークに最適な場所を捜しながら河原を進む。巨岩のあるところまで進むが、適当な場所がないので先程の河原まで引返し、疲れを癒すべく、テントを張る。明日の行定が未知なので食事をすませて早々にシュラフに潜る。

(タイム) 黒蔵谷出合(8:10) 第一支流(12:00) 高山谷(14:30) 第三支流
(17:20) ビパーク地(17:40)

11月4日(晴) 4時に起き6時に出発する。天気は良く、あたりもだいぶ明るくなって来ている。昨日の巨岩の重なる所を過ぎると、すぐにも廊下に入る。体はまだ少しかたい。F10を右に巻き、続く釜を巻きながら、廊下を進む。やがて右手に30mの滝のかかる沢に出合い。これが第四支流である。なおも廊下は続き、快適に進む。上の廊下をぬけ、足下に戯れるアマゴと抜きつ抜かれつ右手にシグクの滝のかかる所を過ぎる。もうこのあたりは水量も減り、廻行もいくら楽になる。それでもF11の懸垂滝を登らなければならない。沢も小さくなり大きな釜は見られない。このあたりには、前日もそうであったが、トロッコのレールや石積された跡が見られ、この地方の林業の古さを知ることができる。二俣を左にとり進むともうここで水が消えている。続く二俣も右にとり進む、するとここでは水が流れている。おそらく地下を通して流れていると思われる。最後のツメのため、急に登り勾配となりつぎつぎに表われる滝を越えて行く、そして最後のF16で沢は終わり、ふり返ると木々の間から大塔山(1122m)が望見される。そして最後のツメを原生林の中を、あるだけの体力で登ると野竹沢師のピークに出た。展望のまったく

きかないこのピークにも三角点がある。

昼食をとった後、ヤブこぎの体勢でコンニャク山をめざす。すごいヤブこぎではあるが獣道を利用してなんとかコンニャク山に着く。この山は名前に違わずコンニャクなどどこにも見当らない。それよりも、うっそうと茂る杉の木のため、どこがピークかわからない程暗く、しかも頂上
が四角形の平坦な地形なので、続く椿尾峠への派生尾根を捜すのに一苦勞する。地図と磁石を頼りに進む。途中には動物が体を洗うための洗い場がある。進むにつれて踏跡らしきものが顕著になり峠の手前では明瞭な道がついている。おそらく植林のために樵が使い道であろう。ヤブこぎから開放され、目的の沢もかたづけて、気が緩んでいるのか、椿尾峠を過ぎてから道を間違え小走りで引返すハプニングもあった。元の道に戻り、四林川の支流皆根川を目指して一気に降りる。沢の音が近くなるにしたがって足どりも軽く、今回の山行に満足しきった表情で林道に降り立ち、ワラジをはずす。

(タイム) ビバーク地(6:00) 第四支流(6:45) シズクの滝(7:25)
最初の二俣(8:05) 野竹法師山(9:35~10:15) コンニャク山
(11:25) 皆根川林道(15:30)

ヨーロッパ・アルピニズムに代表される現代のファッションブルな日本登山が往来する現在、純粋な日本の登山を感じさせてくれる山行であったことが特に印象強く残っている。

期 間 : 11月2日~11月4日
パーティー : 岡 春海 三浦 靖男
参考文献 : (山と溪谷/6385)

(記:三浦)

錫杖岳・鳥帽子岩

10月19日

授業が4時半までであった。それから買い出しに行ったり、パッキングやらに追われ、新大阪駅に着いたのは、集合時間を30分近く過ぎていた。さっそく切符を買って乗り込む。やっと思行ける。ほっとした気持ちだが、私に色々な事を思い出させた。今日この新幹線に乗り込むまでの忙しなかったこと、前田さんに叱られ、岩登りをやめようと決心したこと、それでもせめて、登らなくても、鳥帽子岩の下まで行ってみたいと思ったこと等が、昨日の事なのに、窓の外を走って行く列車並のように速く感じられた。名古屋で乗り次ぎ、高山に3時着。

10月20日

駅を出ると寒気がさっと体を包む。タクシーをチャーターする。夜の街を走りぬけ、満天の星空の下、槍見温泉に4時20分着。5時55分、槍見を後に錫杖に向う。あたりはすばらしい秋一色。さあ行こうと歩き始めてみると、夜行の疲れか、日頃の不節制のためか、かなりきつい。しんどいなと思いつつ歩いていると突然、大きな黒い壁が、はるか前方にそそり立っているのが見えた。前衛フェースだ。デッカイナー。赤と黒のコントラストが、鋭く目に飛び込んで来る。この頃からファイトが湧き始めた。現金なものだなとつくづく思う。7時20分、錫杖沢出合。朝食を取る。これから錫杖沢をつめる。ポッカでの沢歩きは初めてなので、慎重に前の人の足を見ながら、一步一步進む。8時20分岩小屋着、荷物を置いて、サブザックに登攀用具と、嗜好品を少し入れて出発。錫杖沢をつめ、途中から北沢に入る。北沢に入ってから、岩が大きくなった。ホールド、スタンスを捜しながらでないと登れない。だんだん楽しくなって来る。あたりは自然の石庭とでも言おうか、錫杖本峰の裾をおおう緑の木々が、あたかも苔のようであり、点にする岩塊が、選り抜かれた石のようだった。ふり返ると、とんがり帽子のスリーピースが青い空に突き上げている。でも鳥帽子岩はどこ。ああ、見えた。鳥帽子の形そっくり。胸の中にその大きな姿を写し取るには、私の胸は小さ過ぎてはり裂けそう。ここに登るのだなと、頭の中で考えた。ゼルプストをつけ、アンザイレンする。空を見上げる。天気良し。あたりを見わたす。景色良し。メンバーを見わたす。落ちてでも死なない？ 10時30分、登攀開始。岩は堅くてもろい。手の中で小さい石がぼろぼろとこわれる。本番の岩。初めてのアルプス。3ピッチまではどうにか行けたのが、4ピッチ目、絶対行けそうにない悪場に出た。チムニーの上がオーバーハングになっている。アブミを残して置いてくれたので、それに乗って、力いっぱい這い上った。12時鳥帽子のゼークに立つ。タイコ焼きを食べながら、満足感に浸る。でも、これからの懸垂下降

を思うと、心配になる。しかたがない。腹を決める。

万一のために、ビレーしてくれた。必死で覚えて来た基本を忠実に守って、下降を開始した。3ピッチ目、木を乗越して降りなければならない。どうしよう。足場は悪いし、手は離せない。死にぞろいを気持ちだった。1時30分、登攀終了。2時、下山開始。鳥帽子よサヨウナラ。3時40分、岩小屋着。1月21日、岩小屋を後に、槍見に8時20分着。10時40分。バスで高山に出る。12時35分。高山着。帰神。

"海 の 歌"

大海の太古からの息吹き

夜の海風

お前は誰に向って吹いてくるのでもない

このよな夜ふけに目覚めている者は

どんなにしてもお前に

堪えていなければならぬのだ

大海の太古からの息吹き

それはただ古い敵のために

吹いてくるかと思われる

はるか遠くからただひろがりだけを

吹きつけながら

おお 崖のうえで 月光を浴びながら

ゆれ動く一本の無花果の樹が

なんとお前を感じていることだろう。

(リルケ詩集より"海の歌")

会 員 動 静

土居健次 君

世界の山を登って来られた土居健次君が、この度御結婚されました。挙式は、去る11月11日登山研修所で岳友に囲まれて行なわれました。奥さんは、純子さんと言います。お幸せに。

内藤保一 君

10月15日、次男ご誕生、^{タクシ}岳志と命名されました。

乾 昌弘 君

12月10日付けで東京に転勤されました。

岡 春海 君

住所が次のように変更になりました。

明石市前ヶ丘1の9の8

兵 岳 連

訪台友好登山隊（昭和48年12月26日～1月6日）

本会より岸本光弘、内藤正司両君が参加されます。

主目標は玉山（3994M）の登頂。